

日本語のタイトル

所属 名前 1、所属 名前 2

日本語の論文要旨。日本語の論文要旨はこの部分に書いてください。自動的に文字サイズ、左右の余白を調整してくれます。このアブストラクトの字数によって本文部分の行数が影響を受けますので、ある程度の文字数で論文要旨を作成してください。

英語のタイトル

英語の所属 英語の 名前 1、英語の所属 英語の 名前 2

Abstract: 英語の論文要旨。英語の論文要旨はこの分に書いてください。自動的に文字サイズ、左右の余白を調整してくれます。

Key Words: キーワード

1 緒論

緒論は、ここに書いてください。通常の LaTeX と同様に一行開けると自動的に改段されることになります。

基本的に章は上記のように記述することによって自動的に生成することができます。章の標題の上下は自動的に 1 行の改行が入ります。

2 本文 1

本文は、ここに書いてください。

この LaTeX サンプルファイルが利用しているスタイルファイルは、経営システム学会の学会誌投稿規程および投稿論文の論文執筆細則にあわせて作られておりますが、投稿論文者用の参考スタイルとして位置づけられております。体裁が学会の規定に沿ったものであれば、標準のスタイルを調整して論文作成を行うていただいても構いませんし、自作のスタイルファイルを作成することや他の標準のスタイルファイルを流用して論文を作成しても結構です。その他何か質問などがありましたら、編集委員会まで御連絡ください。以下にスタイルファイルの一覧を示します。

サンプルファイル

sample.tex : この TeX ファイル自身

fig1.eps : 取り込み用の図 (eps ファイル)

経営システム学会 **LaTeX** スタイルファイル

jams2.sty : 1 ページ目の設定スタイルファイル

jamsty2.sty : 字数と行数の設定スタイルファイル

jamstwo.sty : 2 段組用のスタイルファイル

その他の一般的な **LaTeX** マクロファイル

epsf.sty : 図 (eps ファイル) 取り込み用マクロファイル

参考文献番号の参照の仕方

本文中における参考文献の参照は次のように cite を使うことによって文献番号を参照することができます [?]。

数式の書き方 1

1 行の式は以下のように書きます。自動的に式番号が生成されます。

$$s = f(x_1(t), x_2(t), x_3(t), t) \quad (2.1)$$

式番号を本文中で参照したい場合は、上記のように数式環境の中で label を付けて参照できるようにします。この式の式番号を本文中で参照刷る場合は以下のように ref で参照することができます。式番号の引用の例です。式 2.1 を参照すると、、、

なお、1 行の式で式番号を付けたくない場合は、以下のように記述してください。

$$s = f(x_1(t), x_2(t), x_3(t), t)$$

数式の書き方 2

複数行の式は以下のように書きます。式番号は、各行に自動的に生成されます。

$$\frac{\dot{V}}{V} = \frac{\partial \dot{x}_1(t)}{\partial x_1(t)} + \frac{\partial \dot{x}_2(t)}{\partial x_3(t)} + \frac{\partial \dot{x}_3(t)}{\partial x_3(t)} \quad (2.2)$$

$$= \lambda_1 + \lambda_2 + \lambda_3 \quad (2.3)$$

もし、一部の式に式番号を付けたくない場合は、以下のように番号を付けたくない式の最後に nonumber 記述してください。最後に nonumber 記述した式は、下の例の 2 番目の式のように式番号が付かなくなります。

$$\frac{\dot{V}}{V} = \frac{\partial \dot{x}_1(t)}{\partial x_1(t)} + \frac{\partial \dot{x}_2(t)}{\partial x_3(t)} + \frac{\partial \dot{x}_3(t)}{\partial x_3(t)} \quad (2.4)$$

$$= \lambda_1 + \lambda_2 + \lambda_3$$

複数行の式で式番号がいない場合は、以下のよう eqnarray を eqnarray* に書き換えることで式番号を付けず複数の数式を記述することができます。

$$\frac{\dot{V}}{V} = \frac{\partial \dot{x}_1(t)}{\partial x_1(t)} + \frac{\partial \dot{x}_2(t)}{\partial x_3(t)} + \frac{\partial \dot{x}_3(t)}{\partial x_3(t)}$$

$$= \lambda_1 + \lambda_2 + \lambda_3$$

3 本文 2

箇条書きの例

箇条書の例 1：番号のいない箇条書きは以下のように記述することによって行うことができます。

- 箇条書の内容 1
- 箇条書の内容 2

箇条書の例 2（番号付の場合）：番号をつけて箇条書きをしたい場合は以下のように記述することによって行うことができます。

- ① 箇条書の内容 1
- ② 箇条書の内容 2

4 本文 3

基本的に章は上記のように記述することによって自動的に生成することができます。

4.1 本文の 3.1

基本的に節は上記のように記述することによって自動的に生成することができます。

図の取り込み（図の貼り付け）方法

図の取り込み方（図の張り込み）は、adobe 社の eps 形式であれば以下のようにして取り込みことができます。その他の図の形式、Word や Excel の図や表を張り込みたい場合は、ファイル形式を変換する必要があります（例えば Windows95,98 の Postscript プリンタを使ってファイルに保存するなど）。

単に図を入りたい部分を空白にしておいて、張り込みたい図のファイル（Word,Excel など）を LaTeX ファイルと一緒に提出していただければ、編集委員会側で張り込むことができます。ファイルではなく、別紙に印刷をして提出された場合は印刷の段階で張り込みすることになります。この場合、張り込みをしたい空白部分と対応する図の関係が分かるようにしてください（鉛筆等で図番号をいれるなど）。

Table 1 表の例

モデル	λ_1	λ_2	λ_3
タイプ 1	0.03346	-0.00037	-1.33061
タイプ 2	0.05436	0.00047	-1.52126

図番号の参照と表番号の参照の例

参考文献のように図の番号や表番号（図 1 とか表 1 とか）を本文中で参照する場合は、上記の図や表の環境に label をつけてください。この label

Fig. 1 図の例の標題はここに

をつけておくと以下のように、文章中で ref を使っ
て図番号と表番号を参照することができます

図??と表??より、、、、

参考文献は、以下のように書いておくと本文中
で参照することができます。

参考文献

- [1] T.Nishikawa and S.Shimizu :The characteristics of
a
biased
estimator applied to the adaptive GMDH, Math.
Comp. Modelling, Vol.17, No.1, pp.37-48(1993)
- [2] H.A.Simon/宮沢 光一監訳 :「人間行動のモデル」,
同文館, pp.224-240(1970)